

「話すこと」における言語運用能力の育成
～教科書を活用した解釈的活動を通して～

福島県立白河旭高等学校 教諭 小澤 恵子

1 研究の趣旨

コミュニケーション能力育成のためには言語知識を蓄えるだけでなく、それを実際に使いこなす言語運用能力を高める必要がある。「話すこと」における言語運用能力を育成するため、教科書の話題や情報について自分の解釈（考え）を話す「解釈的活動」（Brown 1991）に注目した。

解釈的活動を行うことで言語知識を使用する機会が増え、「話すこと」の言語運用能力を育成することができるであろう。

2 研究の概要

(1) 研究の内容と実際

授業実践では様々な場面で解釈的活動を設定し、生徒が既習知識を活用しながら考えを話す活動を段階的に行った。その際、次のような支援を行い、生徒の発話の促進を図った。

心理面 (不安の軽減)	・初めから英語で発話させるのではなく、考えをまとめる準備時間を与える。 ・最初はペアで話し、次にペアを交替したり、グループで話したりする。
内容面 (内容構成)	・発話前に生徒とやりとりしながら、話題に関する背景知識を活性化させる。 ・発話に利用できる知識をキーワードなどで図示し、発話内容を可視化する。
言語面 (表現の提示や修正)	・発話に使用できる語彙や表現を提示する（与えすぎないように注意する）。 ・振り返りの場を設定し、発話の誤りを修正したり、表現を補充したりする。
ループリック評価 (目標の明確化)	・活動の達成度、発話の内容などの観点について目標を定め、4段階の尺度とそれぞれについての記述文を提示する。

(2) 言語運用能力の検証

生徒の発話の変容を検証するため、実践Ⅰ（7月）・実践Ⅱ（10月）での40名の発話をICレコーダーに録音し、その発話データを「流暢さ」「正確さ」「複雑さ」の観点から分析した。右の表がその検証項目と分析結果である。結果について、平均値の差に関する t 検定を行った結果、統計的に有意な差が認められたのは「内容の複雑さ」であり、それ以外では有意差が認められなかった。

検証の観点	検証項目	実践Ⅰ	実践Ⅱ
Fluency (流暢さ)	①発話速度	94.6	89.5
	②沈黙の長さ	22.2	17.5
Accuracy (正確さ)	③誤りの数	15.5	16.1
	④誤りの少なさ	44.9	43.7
Complexity (複雑さ)	⑤内容の複雑さ	2.93	4.75
	⑥文法の複雑さ	1.49	1.49

「内容の複雑さ」の増加は、生徒の発話内容（発話量）の増加を示している。これまで解釈的活動をあまり行ってこなかった生徒が、自分の言語知識を使用して話すことを繰り返したことで、考えを言語化できるようになったと考えられる。しかし一方で、「流暢さ」や「正確さ」などは向上しなかったため、今後も解釈的活動を継続しながら、生徒が徐々にこれらに注意を向けられるようにしたい。

3 成果と今後の課題

実践を通じて、生徒の英語を話すことへの意識にも変容が見られた。アンケート結果では多くの生徒が考えを話すことへの自信を深めた様子が見られた。また、「間違いを恐れず、積極的に話すことができた」と記述回答した生徒が多かった。このような態度は言語運用能力育成に不可欠であり、今後とも生徒が意欲的に参加できる解釈的活動を工夫したい。

系統的な指導を行うため、3年間を見通して「話すこと」の指導計画を作成し、それに基づいて各単元で解釈的活動を展開したい。教科書の多岐にわたる内容について活動を設定するには、学習内容を効果的に活用し、生徒の興味・関心を喚起して考えを引き出す工夫が求められる。また、自発的な気付きを促す振り返りや、活動に応じて評価の観点を精選したループリックの在り方について研究を深めたい。

今後も解釈的活動を継続し、最終的には、生徒が自分の考えについて、即興で自信をもって表現できるようになることを目標に、言語運用能力の向上をめざしたい。